

Nagoya Repository 収録に際しての前書き

2013年12月5日

田村 均

次頁以下に公開する文書「自己犠牲的行為は私たちに何を告げているか？」は、2009年5月16日、慶應義塾大学で開催された日本哲学会第68回大会において、私が行なった一般研究発表の配付資料です。

この発表の内容は、「自己犠牲的行為の説明 ——行為の演技論的分析への序論」『哲學』第61号（2010年4月刊）pp.261-276として、刊行されており、Nagoya Repositoryにもすでに収録されています。

このたび、口頭発表の配付資料を公表することにしたのは、上記論文では紙幅の関係で割愛せざるを得なかった問題背景の考察や文献情報が、特に本資料の注と文献表の部分に含まれていることに気づいたからです。

例えば、

注1は、自制の欠如（アクラシアー）や自己犠牲と行為の演技論的分析のつながりに関して、

注7は、自己犠牲の定義に関して、

注8は、個人（individual）の概念に関して、

注22は、デイヴィドソンの行為論の性格付けに関して、

それぞれ上記論文では割愛した論点が提示されています。また本資料の「Vヒトの発達過程とマネやゴッコ遊びの出現」は、刊行論文では注に挙げた文献情報も含めて全体として割愛されました。

自己犠牲的行為は私たちに何を告げているか？

田村 均（名古屋大学）

I はじめに

1. 本発表の目的は、「自己犠牲」という行為類型の分析を通じて、人間の行為に関し、哲学的常識に反した一つの提案をすることです。私の提案は、端的に言えば、「人間の行為は、マネや演技やゴッコ遊びとして分析され、説明されるべきだ」ということです。
2. 普通、哲学の常識では、「人間の行為は、その人がそれを最もよいと考えてそうしようと決意した、というその人の〈本気の決定〉によって分析され、説明されるべきだ」ということになっています。
3. 例えば、プラトンの『パイドン』98C-E では、裁判という重大な局面にいるソクラテスは、「いまここに座っていること、の原因〔は〕……ここに座っている方が〈よい〉と判断したこと……によるのである」と語ります。
4. また、日常の些細な局面でも、人間の行為は、「…がよい」という何らかの評価的態度と事実の認知とに基づく当人の決定から産み出される、と説明されます。アンスコム¹の再構成によれば、アリストテレスの実践的推論（実践三段論法）は、例えば「ビタミン X は 60 歳を越えたすべての人々にとって有益である。／ブタの臓腑はビタミン X を多量に含んでいる。／私は 60 歳を越えている。／ここにブタの臓腑がある。」といった推論の帰結として、目の前にあるものを食べる、という一つの行為を帰結するものです（アンスコム『インテンション』邦訳 115）
5. こうした哲学の常識に逆らって、人間の行為は、いつも〈本気の決定〉に由来するわけではなく、しばしば、〈ゴッコの決定〉や〈演技としての決定〉によっている、と私は主張します¹。ではいったい、〈ゴッコの決定〉とはどういうことか？ [実

¹ アリストテレスは、無抑制の人について、「〔抑制を失ったひとが知識から生まれる言葉を語る場合〕役者が台詞を語るのと同じように、抑制を失ったひとそれらの言葉を語るのだ」と指摘している（『ニコマコス倫理学』加藤信朗訳 1147a20 強調は引用者）。自己犠牲的行為をゴッコ遊びや演技の次元で解釈するという着想は、或る程度、このアリストテレスの言葉からの、一種の自由連想である。個別的には、フリをすること（pretence）や、ゴッコ遊び（games of make-believe）について、Nichols and Stich 2003 と Walton 1990 から多くを学んだ。また、山崎正和 1988 [1983] は本稿と論点や手法は異なるが、行為全般を演技から見るという大枠に関し、有意義な示唆を与えられた。「役に扮するとは、……自分でありながら自分ではなく、別の存在になりながらいまだそれではない、と主張することだといへる（山崎 1988, 372）」といった指摘は示唆的である。

演：二つの空のグラスに、空のボトルから何か注ぐ動作をし、片方のグラスをひっくり返した後、「どちらが空か？」と問うと……。 (see Leslie1994) 私たちは、ほとんど気づくことさえないくらいなだらかに、〈ホンキ〉から〈ゴッコ〉に移行して判断し、行為できます。

6. 人間は、社会性の動物として、共同的・社会的な次元の生を生きています。この次元は、個としての人間の〈本当の気持ち〉や〈本気の決定〉から、そのまま到達できるとは限りません。共同的・社会的な次元における行為は、しばしば周囲の人々のやり方に合わせたマネやゴッコ遊びや演技として成立します。マネやゴッコ遊びや演技の本質は、自分の身体が、虚構を設定する共同的な意図（シナリオ）に従って動く、ということにあります。
7. シナリオに従うとはいえ、舞台上の俳優は操り人形とは違います。マネやゴッコ遊びでも、行為者は、自分の身体を十分意図的に動かしています。共同的・社会的な次元における生は、他人の意図に沿って自分が意図的に動く、という性質のものなのです²。このような次元は、行為者の欲求と信念だけでは説明できない。他人の欲求や他人の信念を計算に入れなければなりません。私のこの主張の決定的な証拠は³、自己犠牲という行為類型の存在です⁴。

² ヒュームによれば、ある人の持っている力によって別人が動くという現象は、人々が取り結ぶ社会的諸関係の源である。次の引用を見られたい。

「一方の対象が他方に運動や作用を生み出す場合だけでなく、単にそれを生み出す力 power を有する場合にも、二対象が原因結果の関係で結合されている、と言ってよい。そして、これが、人々がそれによって社会においてたがいに影響し合い、支配と服従の絆で結ばれるところの、すべての利害と義務の関係の源である、と言ってよい。「主人」とは、力 force または同意によって生じるその地位のゆえに、「しもべ」と呼ばれる他者の行為を、特定の点で指図する力 power を持つものである。……人が何らかの力 power をもつとき、それを行使するのに必要なのは、意志の実行 the exertion of the will のみであり、これ（意志の実行）は、どの場合にも、あり得る（possible）ことと見なされ、多くの場合、ありそう（probable）なことと見なされる。（Hume 2000, 1.1.4.5 / 邦訳 ヒューム 1995, 23-4）」

この、ある人の意志の実行（意志表示）によって別人が動く、という構図は、権力 power という現象の極めて簡潔な見取り図である。哲学的常識では、人の意志とは基本的にはその人の身体を動かす力であると想定されるが（デカルトやロック）、人の意志は別人の身体を動かすこともできて、これが権力というものである。共同的・社会的な生存は、この力の水準で成立する。

³ 私の主張を単純化して言えば、自己犠牲的行為を説明するには、〈ベタな事実〉としては拒絶されることを〈虚構の設定〉の中で演技的に遂行する、という行為者の意識の二重性を想定する必要があること。よって、自己犠牲的行為は〈本気の決定〉説では、説明できず〈ゴッコ〉説をとる必要があること。従って、自己犠牲的行為が実在すると認めるなら、行為説明の〈ゴッコ〉説が正当化される場合があると認めなければならないということ、である。

⁴ 「自己犠牲」という問題が、哲学的に考察されることはまれである。管見の及ぶ範囲で

Ⅱ 自己犠牲のパラドックス

8. 自己犠牲の伝承譚は、人類文化に広く見られます⁵。日常生活でも、下の例のような自己犠牲は十分ありえます。

例：一人の女性が、親戚の老人たちの世話をするために、自らの結婚とキャリアを犠牲にした⁶。

9. ところが、この例は、個人の合理的決定によって行為を説明する哲学的常識に対し、難問を提出します。いったい、この女性が最善と思って選んだのは（つまり、この女性の〈本気の決定〉）は、(ア)「老人たちの世話」と(イ)「結婚とキャリアの追求」の、どちらだったのでしょうか？

10. 第一の答えは、この女性が最善と思ったのは(ア)「老人たちの世話」だ、という答えです。行為選択に関し、〈その人がそれを最もよいと考えてそうしようと決意した、というその人の〈本気の決定〉〉があることを前提し、現実の行為から逆算すれば、この答えにならざるを得ない。

11. この場合、この女性は、結婚とキャリアの追求よりも老人たちの世話の方が〈よい〉と自ら本気で決定し、実行した。すると、この女性が結婚とキャリアを「犠牲にした」と言うのは難しくなります。自分が本気でそうしたいことを実現できたのです。この種の自己実現は、直観的に言って⁷、自己犠牲ではないでしょう。この女

は、浅野 2007 ; Bradley 1883; Bradley 1894; Gelven 1988; 柏端 2007 ; 川谷 2007 ; Overvold 1980; Overvold 1982; 柴田 1999; 塩野 2008; 田村 1997; 田村 1999; 田村 2005 ; 田村 2008a ; 田村 2009 など。なお、宗教学や宗教人類学における犠牲研究は数多い。それらについては Carter (ed.) 2003 によって 19 世紀末から現代までの犠牲研究の理論的概要を通覧できる。

⁵ 十字架上のイエス、シャカの捨身飼虎譚、古事記のオトタチバナヒメノミコトの入水とといった事例からアウシュヴィッツのコレベ神父や神風特攻隊の少年航空兵にいたるまで、あるいはエウリピデスの「アウリスのイーピゲネイア」から、ハリウッド映画「アルマゲドン」に至るまで。自己犠牲という行為類型が、私たちに強く刺激する何かを持っていることは明らかである。

⁶ この例は、次のコリンズ・コウビルド英語辞典第 1 版の“sacrifice”の例文を一部改変したものである。‘... women who have sacrificed marriage and career to care for elderly relatives’ ちなみに、この例文は同辞典第 2 版には見当たらない。

⁷ 直観的な理解の水準を越えて自己犠牲を厳密に定義することはなかなか困難だが、Overvold 1980, 田村 1997, 柏端 2007 から、関わりそうな特徴を幾つか単純化して抽出すると、以下ようになる。要は、自分にとっては望ましくないが他の人々にとっては望ましいことを、自分が心からよいと思うことなく実行する、ということである。

以下の 1～5 のような相異なる x と y という 2 つの行為の選択肢が存在するとき、行為者 A が x を行なうと、その行為は A における自己犠牲的行為になる。そして、この場合、

性は自分にとっての最善を選び取るという意味において合理的で、その限りで自分を犠牲になどしていない、つまり本当は自己犠牲的ではないわけです。しかしながら、この見方は的外れに感じられます。

12. すると第二の答えは、この女性が最善と思ったのは(イ)「結婚とキャリアの追求」の方だ、という答えです。
13. この場合、この女性は自分にとって最善の選択肢を断念して他人に尽くしたのだから、確かに自己犠牲的ではある。しかし、この女性は、自分の〈本気の決定〉を自分で裏切ったことになる。ずいぶん不合理です。この女性は、自己犠牲的だが不合理である、と言わざるを得ない。しかし、この解釈は再び的外れに感じられません。この女性の振る舞いは、決してわけが分からない(不合理な)ものではないからです。こうして第二の答えも退けられます。
14. 残る第三の答えは、この女性が最善と思ったのは、(ア)「老人たちの世話」と(イ)「結婚とキャリアの追求」の両方だったのだ、という答えです。老人たちの境遇を考えれば世話するのが最善だけれど、自分の境遇を考えれば結婚とキャリアを追求するのが最善である、というように彼女は考えた。そして、自分の最善は断念し、老人たちの最善を選択した。(イ)「結婚とキャリアの追求」の断念が自己犠牲を成り立たせ、(ア)「老人たちの世話」の選択が合理性を成り立たせる。こうしてこの女性の行為は、個人の合理的かつ自己犠牲的な決定によるものとして、うまく説明されたかのように見えます。
15. しかし、この第三の答えは、行為の決定過程を説明できません。この女性は、二つの選択肢の間でどうやって決定したのでしょうか？ やっぱり(ア)「老人たちの世話」が最善だと考えて、そうしようと本気で決定したのなら、状況は第一の答えに戻ります。彼女は合理的だが自己犠牲的ではない。これを避けて、やっぱり(イ)「結婚とキャリアの追求」の方が最善とする決定があったのだとすると、状況は第

xを行なう理由が行為者の中に見出せないことが、行為論上の難問である。

- 1 Aがxを行なうと、yを行なった場合よりも、Aにおける効用(善)は小さい。(Aにとってはxよりyの方が望ましい。)
- 2 Aがxを行なうと、yを行なった場合よりも、Aを含むある共同行為主体(Aにとっての「われわれ」)における効用(善)は大きい。(Aの属す或るグループにとってはyよりxの方が望ましい。)
- 3 Aにとってのyの効用(善)とAの属すグループにとってのxの効用(善)を比較して、その大小を決定することはできない。(A個人とAの属すグループとの効用を測る共通の尺度が存在しない。)
- 4 行為者Aは、xとyの両方について、行為の選択に関わる十分な情報を得ている。(Aは上の1から3をわきまえている。)
- 5 行為者Aは、自らの考えに従ってxとyのどちらを選ぶこともできる。(Aはあからさまな強制の下にはない。)

二の答えに戻ります。彼女は自己犠牲的だが不合理です。これを嫌って（ア）「老人たちの世話」も（イ）「結婚とキャリアの追求」も同じくらいによいのだとすると、これは第三の答えそのものです。行為者は二つの選択肢の間で引き裂かれたままであり、〈本気で決意する主体〉になりえない。このような行為者は、そもそも統合された個人ではない⁸。

16. こうして私たちは、自己犠牲的行為の中に、個人の合理的決定によって行為を説明する哲学的常識に突きつけられた一つの難問を見て取ることとなります。自己犠牲など本当は存在しない（第一の答え）か、自己犠牲は不合理な行為である（第二の答え）か、自己犠牲は個人の行為ではない（第三の答え）か、いずれかです。個人と自己犠牲と合理性という三つの概念を同時に成り立たせることはできないのです。⁹

17. 以上のように、〈人間の行為は、その人がそれを最もよいと考えてそうしようと決意した、というその人の〈本気の決定〉によって分析され、説明されるべきだ〉という考え方を採用していると、自己犠牲的行為という行為類型は、うまく説明できません。自己犠牲が生み出される現実の局面を、具体的に調べてみることにします。

Ⅲ 熊祭（イヨマンテ）とエウリピデス「アウリスのイーピゲネイア」

18. 上の例は比喻ですが、文字通りの自己犠牲譚は、当事者が犠牲者 *victim* として殺害されたり死んだりするかたちで物語られます。自己犠牲の起源には動物（犠牲獣 *victim*）の殺害を含む犠牲儀式（くぎぎ 供犠）があるでしょう。以下では、犠牲儀式の

⁸ ここで「統合された個人」と呼ぶ存在者は、「一つの *will* によって定義される行為者 *agent*」である。現代英語の使用規則において、‘*will*’ は一人に一つしかない (Albritton 1985 [2003], 413)。西方キリスト教文化圏の言語使用上の慣習（ないしフォーク・サイコロジー）として、*voluntas*、*will*、*volonté*、*Wille*、といった語によって指し示される行為決定メカニズムは、一人に一つしかないと考えられているようである。そして、この決定メカニズムがその行為者の同一性を定義するものであり、これによってヒトは動物の一個体というだけでなく、人格 (*person*) としての存在性格を獲得する。ちなみに、日本語の「意志」は一個体に同時に複数ありうる、と考える日本語使用者が圧倒的に多く、私の調査ではつねに 8 割を超える (田村 1997; 田村 2008b)。行為の決定メカニズムを扱うときには、どのような言語習慣を前提にして議論しているか、自覚的な注意が必要である。

⁹ 以上は、主として田村 1997 と田村 1999 の論点の一部の要約である。第三の答えに関わるジレンマの論理的構造については、柏端 2007 の第 4、5 章の分析から多くを学んだ。なお、柏端 2007 とは異なる私の見解は田村 2008a に述べたが、最大の相違は、柏端 2007 とは違って、私は、共同的な合理性に行為者が端的に服従するという、行為者個人の理由付けを本質的に受けつけない決断が介在しない限り、自己犠牲的行為は成立しない、と考える点にある。

実例としてアイヌのイヨマンテ（熊祭）を取り上げ、自己犠牲の伝承の例として、エウリピデスの劇作品「アウリスのイーピゲネイア」を取り上げます。両者には、興味深い類似があり、その類似は、人間の行為一般を説明する上で、有力な手がかりになります。

19. イヨマンテは、秋に森で捕らえた子熊を村に連れ帰って大事に育て、年が明けてから、その子熊を殺して魂を山に送り返す儀式です。子熊の魂は、村人から和解と再生のメッセージを託されて、山に住む親たち（神々）のもとに旅立つとされます¹⁰。イヨマンテのクライマックスは2日目、子熊を殺して魂を神々のもとへ送り返す¹¹儀式です。
20. その日、子熊は複数の引き綱をつけて檻から出され、女たちの掛け声に送られながら、男たちに引かれて式場に立てられた棒のところまで進んでいきます。このとき、棒状の神具（タクサ）を持った男たちが子熊の前後左右に随い、順路をそれてうろつく子熊を神具で突いて制御します。子熊は興奮し、体を揺すって暴れますが、その動作は、「子熊がやがてすぐに神の国に行ける喜びを表している（アイヌ民族博物館編 2003, 81）」と解釈されます。
21. 子熊は棒につながれて歌と踊りを奉納された後、また綱に引かれて式場内のあちこちを練り歩きます。そのとき古老たちは子熊に花矢¹²を一斉に射かけます。子熊は怒ってもがきうなります。「そうした子熊の動作もまた、古老たちによると子熊が再び神の姿になって神の国の親元に帰ることが出来る喜びを表している（アイヌ民族博物館編, 2003, 82）」と解釈されます。河野広道『熊の話』によれば¹³、「熊がうなり、花矢がとび、メノコが唱い、アイヌ達がとび廻る。小さな子供たちまでが熊と一緒に踊っている。アイヌ達は熊が怒り狂うのを「喜んで踊っている」と信じているので「熊が踊っている」とか「この熊の踊はなんと上手なんだろう」とほめたたえる」。
22. このようにイヨマンテでは、子熊が棒で突つかれたり儀式的に矢を射かけられたりして体を動かすたびごとに、人間たちは、その一つ一つの動作を、神の子である子熊の父母の元へ帰れる喜びの表現として読み取って行きます。子熊の身振りは、神話に沿って、子熊の意図によると見なされ、この身振りにもとづいて、子熊に喜

¹⁰ Kindaichi 1949; Kitagawa 1961; バチラー1995.

¹¹ 「イヨマンテ」という語は、「イ」が「それ、もの」の意であり、「オマンテ」が「送る、行かしめる」の意である。（宇田川洋 1989, 24 ; 河野本道 1985）

¹² 矢尻を外して飾り付けをした矢。

¹³ 財団法人 アイヌ民族博物館編 2003, 82 の引用より。

びの気持ちが帰属されて行くわけです。もちろん、人々は、〈ベタな事実〉としては、子熊が喜んで殺されるのではないことを、十分よくわきまえているはずですが、子熊は、神話と儀式の〈虚構の設定〉に合うように、棒で突かれて適切に演技させられるわけです。こうして、神話に合わせた虚構の心理が、犠牲動物 victim に一方的に帰属されます。

23. このとき、もしも当事者（子熊）が儀式の式次第と背景の神話（神々の国へ帰る等々）を理解できたとしたら、まったく同じ身振りにもとづいて、演技している状態が出現するでしょう。つまり、子熊は、定められた儀式の流れの中で、場面に合わせた適切な身振りを行ない、儀式の予定する役割上の心理をそこに現実化し、内心においては依然として死にたくないとしても（もちろん！）、自ら進んで犠牲としての死を実現する結果になる。自己犠牲がここに浮かび上がります。

24. イーピゲネイア¹⁴の自己犠牲は、トロイア戦争の発端の伝承に基づいています。スパルタ王メネラオスは、妻ヘレネをトロイアの王子パリスに奪われます。メネラオスの兄アガメムノンは、ギリシア全土から勇者を募り、トロイア侵攻を企てます。ギリシア軍がアウリスの浜に結集してまさにトロイアへ船出しようとする時、風は凪ぎ、艦隊は足止めされます。原因は、総大将アガメムノンに女神アルテミスの怒りをかう振る舞いがあったからと分かり、女神の怒りを鎮めるため、アガメムノンには娘イーピゲネイアを犠牲として捧げることが求められます。

25. エウリピデスの劇「アウリスのイーピゲネイア」は、アガメムノンがイーピゲネイアとその母クリュタイメストラに、イーピゲネイアと勇者アキレウスとの婚約がととのったという偽りの手紙を送り、二人をアウリスの浜に呼び寄せたところから始まります。アガメムノンは苦悩しています。偽りは露見し、騙されたと知ったクリュタイメストラは、娘を守るため、アガメムノンを激しく非難します。イーピゲネイアも「蕾のままに私を死なせないでください。日の光を仰ぐのが喜びなのですから。(1218)」と父アガメムノンに哀願します。アキレウスも事の真相を知って、イーピゲネイアを守ると宣言します。

26. そうこうするうち、「お母様、兵士の群れがこちらに来ます (1338)」というイーピゲネイアの不吉な言葉に続いて、アキレウスは、ギリシアの軍勢の中に姫を殺せという恐ろしい叫びが聞こえると告げ、自分も「石を投げつけられました (1349)」と報告します。クリュタイメストラは、アキレウス配下の兵士までもが彼に刃向かっていると知り、「もう終わりです、娘よ (1353)」、「群衆はとても危険です (1357)」と絶望の言葉を洩らします。騒然とする中で、イーピゲネイアは、次のような決意を述べます。

¹⁴ ギリシア語の長母音は、固有名「イーピゲネイア」と引用文中を除き、表記しない。

27. 「お母様、私の話を聞いてください。お父様へのお怒りは謂われのないことだと思いますから。……思案の末の私の考えを、お母様、聞いてください。私は死ぬ決心をしました。私の望みは、卑しい心を捨てて誉れのある行動をとることです。……私は決して命を惜しみすぎてはならないのです。私をお生みになったのは、全ギリシアのためです。お母様一人のためではありません。幾万という兵が楯に身を守り、幾万という兵が櫓を手にして、祖国が侵されれば、勇敢に敵と戦ってギリシアのために死んでゆくのに、私は命がたった一つという理由で、これをすべて妨げるのですか。……女神アルテミスがこの身を取ろうとお望みならば、死すべき人間の私が女神に逆らえるのでしょうか。いいえ不可能です。私はこの身をギリシアに捧げます。生贄にして、トロイアーを滅ぼしてください。それがいつまでも私の記念となり、子供となり、結婚となり、誉れともなりますから。…… (1370~1400)」
28. こうしてイーピゲネイアは、生贄として捧げられるために、自ら祭壇に上るのです¹⁵。このイーピゲネイアの決意表明は、突然の翻意として唐突に劇中に出現します。この翻意をどう説明するかが「アウリスのイーピゲネイア」解釈の伝統的な問題となっています¹⁶。しかし、この問題の解決は私たちにはごく簡単です。すでに見た例で明らかのように、自己犠牲とは、行為する主体が分裂せざるを得ないような行為類型でした。生き延びたいのに進んで死ぬと言う、という主体の分裂こそが、自己犠牲の本質なのです。
29. 私たちの真の問題は、このような主体が、分裂にもかかわらず、自発的かつ意図的に¹⁷行為するのはどのようにしてか、ということでした。ここで、イヨマンテとの比較が役に立ちます。イーピゲネイアは、イヨマンテになぞらえれば、儀式の式次第と背景の物語を理解した子熊という位置を占めているのです。
30. イーピゲネイアは暴力的な群衆（兵士たち）によって追い詰められています。子熊は実際に棒で突かないと動きませんが、人間は暴力が迫っているという情報だけで足ります。そして、子熊と違って、自分に期待されているのが何なのか、イーピゲネイアには解ります。イーピゲネイアには、アガ멤ノンの苦悩、女神アルテミスの怒り、戦争の意義、群衆の力、といった背景の事情が十分に理解できます。

¹⁵ エウリピデスの劇では、女神アルテミスの配慮により、最後の瞬間、身代わりに牝鹿が犠牲とされ、イーピゲネイアの姿は消え失せた、と語られる。

¹⁶ アリストテレスは、悲劇における首尾一貫しない性格の例として「アウリスのイーピゲネイア」を挙げ、「嘆願者として救いを求めるイーピゲネイアは、そのあとの彼女とはまったく似ていない（『詩学』1454a30）」と述べた。

¹⁷ さしあたり、「自発的」とは自分の身体を自ら進んで動かしていること、「意図的」とはなぜそうしているのか説明できること、とする。

自分としては生き延びたいが、群衆は生贄を求めている。自分の願いは願いとしてあるけれど、期待されているのは「ギリシアのために死にます」という決意表明だ。それがはっきり解るから、イーピゲネイアはそう言うのです。

31. イーピゲネイアは、他人の作ったシナリオに沿って語り、期待された適切な振る舞いを行いません。自分が何をしているのかよく理解した上で、意図的に振る舞っているけれど、その言動を通じて浮かび上がってくる意図は、元来は自分のものではありません。このように、人間は、他人の意図に従って、自分の身体を意図的に動かす動物なのです。

32. マネやゴッコ遊びや演技において、共有された〈虚構の設定〉に基づいて人々が身振りや発話を適切に行なうのと同じように、自己犠牲的行為においては、状況を理解しうる主体が、〈ベタな事実〉としての自分の気持ちを棚上げし、状況の要請としての〈虚構の設定〉に合うような適切な言葉や身振りを、自ら意図的に産出します。私たちは、演技の水準を設定したときに、はじめて、行為主体の分裂を含む「自己犠牲」という行為類型を、出来事に矛盾無く適用できるようになります。冒頭に挙げた、結婚とキャリアを捨てて老人の世話をする女性の例も、同じようにして説明できるでしょう¹⁸。

IV 現代の行為論から除外された行為類型——端的に規則に従う振る舞い

33. アンスコムは、実践的推論 *practical reasoning* を描き出すとき、何らかの慣習や規則に端的に従って行為する事例を、考察範囲から除外しました。それらは推論の形式を備えていないので、理由 *reason* にもとづく行為ではないと見なされました。具体的には、端的な返礼や端的な復讐¹⁹、端的な義務の遂行は、理性の働き *reasoning*

¹⁸ この女性は (ア)「老人たちの世話」の善も、(イ)「結婚とキャリアの追求」の善も、ともに的確に理解できる。また、周囲が自分に対して (ア)「老人たちの世話」を選択することを期待している、ということも同時に解る。そこで、彼女は他の他人たちの意図(期待)に服従し、自分個人の意図とは異なる役割上の身振りとして、老人たちの世話をすると考えられる。

このとき、演技的な二重性を忌避して、自ら進んで行なったのだからそれは本人の〈本気の決定〉なのだ、と言いつのると、自己犠牲という行為類型が失われる。他方、やりたくもないことをやっている不合理な人だ、と決めつければ、この女性の行為に含まれている合理性の要素——老人たちを世話することは理に適った行為でありうる——が失われる。

¹⁹ 本文中の引用は、返礼と義務の例。復讐については次を見よ。「彼は私の父親を殺した。だから、私は彼を殺すつもりだ」は、推論の形式をまったくとっていない。「私は彼を非常に高く評価しているから、私は彼が発起人をしている請願に署名するつもりだ」もまた、推論の形式をまったくとっていない。これらの内にはまったく計算が含まれていないということが、[推論になるかならないかを分ける] 相違である。…… (Anscombe 1957, 65)

にもとづく行為ではないとされています。

34. 「彼は非常に感じがよかった……だから彼を訪問するつもりだ」〔は〕、それが示唆していることが、例えば、私は彼の感じのよい態度に返礼をするつもりだ、彼が感じよいことが彼を訪問する理由だ、ということなら、これは推論 *reasoning* や計算 *calculation* の例ではない。しかし、その示唆することが「それゆえ、彼にもういっぺん会うことはたぶん楽しいだろう。だから、彼を訪問するつもりだ」であるなら、これは推論ないし計算なのである。(Anscombe 1957, 66)』

35. 「私はこうすべきだ、だから私はこうする。」が実践的推論の一例でないことは、「これとてもいいわね、じゃ、ちょっといただくわ (This is nice, so I'll have some.)」が実践的推論でないのと同様である。(Anscombe 1957, 79)』

36. アンスコムは、しかしながら、慣習や規則に端的に服従する振る舞いがあることに気づいてはいます。アンスコムの理解では、人間は推論や計算をしなくても行為可能なのです。だが、このタイプの行為をアンスコムは考察の主題としていません。次の引用を見てください。

37. 「返礼」の意味は何だろうか？「返礼」という概念の形成の背後には、原初的な、あるがままの形式 (*the primitive, spontaneous, form*) がある。この「返礼」という概念は、いったん形成されると願望の目的とされることができる²⁰。しかし、原初的であるがままの例では、その形式は、「彼は私に対して感じがよかった——彼に会いに行こう」なのである。(Anscombe 1957, 66)』

38. このように、人間の行為には、理性が関与する以前の、慣習や規則に端的に従って振る舞う「原初的であるがままの形式」がある。そして、強調すべきことは、このような行為もまた意図的な行為だ、ということです。「彼は私に対して感じがよかった——彼に会いに行こう」という心理から或る人に会いに行った人物に向かって、「あなたはなぜ彼に会いに行ったのか」と尋ねたら、この人物は、「彼は感じがよかったから」と即座に答えるでしょう。だから、この人物の行為は、アンスコムの基準に沿って意図的な行為の部類に入ります。とはいえ、アンスコム的な意味においては、これは理由にもとづく行為（比較考量をともなう理由付けによる行為）ではないのです。

39. デイヴィドソンは、行為の因果説を、実践三段論法の枠組みを参照しながら提出しています²¹。デイヴィドソンの行為の理論では、人間の意図的行為は、おおむね

²⁰ 願望の目的物として対象化され、実現手段を理性的に計算して行為する、という実践的推論の形式に当てはまるようになる、ということ。

²¹ Davidson 1963.

実践的三段論法の形式に整理可能な脈絡で生起する²²、と想定されているように見えます。アンスコムが上のようにして注意深く除外した事実——すなわち、規則や慣習に端的に従って振る舞う局面が人間にはあり、理性推理 *reasoning* とは別の仕組みで意図的な行為が生じうるという事実——は、以後の行為の理論であまり顧みられなかったようです。

40. 私たちが自己犠牲の分析を通じて見出したのは、自分なりの理由づけを経由しないで、理性の行使とは独立に、場の状況ないし共有されたシナリオに端的に服従して、なおかつ自発的・意図的に人間は行為しようということ、および、自己犠牲的行為はこのような局面を考慮に入れないと説明がつかないということです。慣習や規則に端的に従う行為を説明するために私が提案する考え方は、個々の実践的推論にもとづく理由づけの作用から独立に、〈人間の行為は、マネや演技やゴッコ遊びとして分析され、説明されるべきだ〉ということです。

V ヒトの発達過程とマネやゴッコ遊びの出現

41. マネやゴッコ遊びや演技は、幼児の発達において重要な要素を占めます。ヒトは、2歳頃に、〈ベタな事実〉とは別の〈虚構の設定〉を適切に取り扱うことができるようになります。ゴッコ遊びは、3～5歳頃に他人の心を読み自分を内省する能力（「心の理論」）が発現する基盤になっていると推定されます。²³
42. 新生児はおとなの顔つきを真似る能力を生得的に備えています²⁴。幼児は、6カ月から12カ月で、視線や指さしを手掛りにして他人の注意の目標物を突き止める共

²² 「おおむね」とした理由は二つである。第一の理由は、デイヴィッドソンにおいても、理由付けの成り立たない意図的行為の存立が、一応認められているからである。すなわち、「意図的行為でありながら、自分が現に行為したときなぜそうしたのかをまったく説明できないような場合もあるように思われる (Davidson 1963[1980], 13/邦訳 デイヴィッドソン 1990, 17)」とある。デイヴィッドソンも、アンスコムと同じく、行為者が端的に慣習や規則に従うのみで満足な理由付けが為されない事例を、視野に入れてはいただろう。他方、第二の理由は、現実の行為を発動するには実践的三段論法を積み重ねるだけでは足りない、とデイヴィッドソンが主張するからである (Davidson 1978)。私たちにとって示唆的なのはこちらの方である。デイヴィッドソンの考えでは、行為の発動には、実践的三段論法に加えて、「しよう」と意図する *intending to do* ことが不可欠なのである。ここはデイヴィッドソンが期せずしてキリスト教的な意志 *will* の概念に先祖返りしている局面である (田村 2007; 田村 2008b)。キリスト教的な意志概念は、パリサイ派的な規則遵守の対極にある。デイヴィッドソンは、仮に端的に規則に従う振る舞いを視野に入れていたとしても、たぶん、それをまともに考慮する気はほとんどない。この先祖返りの姿勢には、それがよく浮かび上がっている。

²³ Leslie 1987; Leslie 1994; Nichols and Stich 2003; Perner 1988.

²⁴ Meltzoff and Moore 1977; Meltzoff and Moore 1983.

同注意の能力を発達させるようになります²⁵。さらに、18カ月頃には、動作の外形的な模倣から、動作に込められた意図や目標の模倣に移行します²⁶。こうして他人の意図を自分の意図とする基本的な能力が形成されます。

43. 幼児における器物の使用法の習得は模倣の一種と考えられます。器物の使用は、2歳を過ぎる頃に、ゴッコ遊びにおける代替物の使用に推移します²⁷。ゴッコ遊びは、共同的な〈虚構の設定〉の下での推論や身振りとして成立します²⁸。

44. 3歳から5歳にかけて、幼児は、世界について他人が自分と違う偽なる認識（信念）を持ちうること、および自分の認識（信念）も偽になりうること、をうまく扱えるようになります。言い換えれば、他人の心的表象を、自分の信念とは異なるものとして自分の心の中で構成することができるようになり、同時に、客観的世界とは異なるものとして自分や他人の表象を取り扱うことができるようになります。²⁹

45. 複数の人間に共有される信念や意図の実現の一種として、共同行為があります。共同行為は、或る初期設定の下、共有された目標に向かってそれぞれが役割を果たすという点で、一種のゴッコ遊びと見ることが可能です。そして、共同行為においては、個の意図が共同性から“離脱”する現象が見られます。³⁰

46. 以上のような発達心理学の知見および共同行為に関する洞察を受け入れると、他人の意図と無関係に人間が行為することは、極めてまれであることが分かります。人間の自発的で意図的な行為は、他人の意図や場の状況を考慮にいれ、しばしば自分の〈本当の気持ち〉や〈本気の決定〉を棚上げして、演技的に遂行されることがある、と考えられます。

VI. 結び

47. 慣習や規則に服従し、同時に自発的かつ意図的に行為する、というのが人間の行為の現実です。この現実は、慣習や規則に端的に従う行為を、アンスコムが考察

²⁵ Scaife and Bruner 1975; Bruner 1983; Butterworth 1994; Butterworth 2001; Butterworth and Jarrett 1991; Tomasello 1995; Tomasello 1999; Tomasello 2001.

²⁶ Meltzoff 1995.

²⁷ McCune-Nicolich 1981.

²⁸ Leslie 1987; Leslie 1994; Wellman and Estes 1986; Perner 1988.

²⁹ Flavell 1988; Gopnik 1993; Gopnik and Astington 1988; Perner, Leekam and Wimmer 1987; Wellman, Cross, and Watson 2001; Wimmer and Hartl 1991; Wimmer and Perner 1983.

³⁰ Gilbert 1997 ; 柏端 2007.

の主題から除外したときに背景に退き、デイヴィドソンが欲求と信念による説明を行為の普遍的な説明形式であるかのように語ったことによって、行為の理論家の視野から消えたようです。発達心理学が教えるように、ヒトは、自律的 *autonomous* な存在である以前に他律的 *heteronomous* な存在として生きています。自己犠牲という行為類型の存在は、私たちが、すべての他律的な要請を、一つ残らず自らの理性によって自律的な形式に変えて内在化できるわけではない、ということを告げています。冒頭で述べたように、〈人間の行為は、マネや演技やゴッコ遊びとして分析され、説明されるべき〉なのです。

参考文献表

- アイヌ民族博物館（編）. 2003. 『伝承事業報告書 2 イヨマンテ——白川善次郎翁の伝承による——』財団法人アイヌ民族博物館.
- 浅野光紀. 2007. 「書評 柏端達也『自己欺瞞と自己犠牲——非合理性の哲学入門——』」『科学哲学』40-2.
- アリストテレス. 1988. 『ニコマコス倫理学』加藤信朗訳（アリストテレス全集 13）.
- アリストテレス. 1997. 『詩学』松本 仁助 岡 道男訳 岩波文庫.
- アンスコム, G. E. M. 1984. 『インテンション』菅豊彦訳 産業図書.
- ヴィノフスカ, マリア. 1982. 『アウシュヴィッツの聖者 コルベ神父』聖母の騎士社.
- 宇田川洋. 1989. 『イオマンテの考古学』東京大学出版会.
- エウリピデス. 1992. 「アウリスのイーピゲネイア」高橋通男訳 『ギリシア悲劇全集 第9巻 エウリーピデース』岩波書店.
- 大貫恵美子. 2003. 『ねじ曲げられた桜 ——美意識と軍国主義』岩波書店.
- 柏端達也. 2007. 『自己欺瞞と自己犠牲——非合理性の哲学入門——』勁草書房
- 川谷茂樹. 2007. 「エゴイズムと自己犠牲 ——ニーチェの利他主義批判の倫理的意義——」『北海学園大学学園論集』132号 pp.1-23.
- 河野本道. 1985. 「アイヌ・宗教」『世界大百科事典 第2版』平凡社
- 柴田正良. 1999. 「癒すべき病としての自己犠牲——田村論文「自己犠牲の倫理的的分析」についての一試論——」『金沢大学文学部論集 行動科・哲学篇』19号 pp.161-175.
- 塩野直之. 2008. 「自己犠牲は本当に可能か ——柏端達也著『自己欺瞞と自己犠牲』を読む——」『福井県立大学論集』30号 pp.61-78.
- 田村 均. 1997. 「自己犠牲の倫理的的分析」、『名古屋大学研究論集』、哲学 43 号、pp.37-64. [http://hdl.handle.net/2237/5599]
- 田村 均. 1999. 「自己犠牲をめぐる三つの物語 ——エウリピデス、ティム・オブライエン、宮沢賢治——」、『名古屋大学文学部研究論集』、哲学 45 号、pp.37-71. [http://hdl.handle.net/2237/5610]
- 田村 均. 2005. 「功利主義者が自己犠牲をするとき ——マーク・カール・オーヴァヴォルドの3論文の分析と評価——」、『名古屋大学文学部研究論集』、哲学 51 号 pp.23-58. [http://hdl.handle.net/2237/7454]
- 田村 均. 2007. 「ドナルド・デイヴィッドソンにおけるキリスト教的フォーク・サイコロジー」『名古屋大学文学部研究論集』、哲学 53 号 pp.29-66 [http://hdl.handle.net/2237/8414]
- 田村 均. 2008a. 「服従と犠牲——柏端達也『自己欺瞞と自己犠牲』をめぐる——」『名古屋大学文学部研究論集』、哲学 54 号 pp.43-78. [http://hdl.handle.net/2237/10567]
- 田村 均. 2008b. 「ドナルド・デイヴィッドソンにおけるキリスト教的フォーク・サイコロジー再考」 [http://hdl.handle.net/2237/10780]
- 田村 均. 2009. 「フリ・まね・演技の行為論的分析——ゴッコ遊びの認知と行動——」『名古屋大学文学部研究論集』、哲学 55 号 pp.1-30.
- デイヴィッドソン, ドナルド. 1990. 『行為と出来事』服部裕幸・柴田正良訳 勁草書房.
- バチラー, J. 1995 [原著 1901]. 『アイヌの伝承と民俗』安田一郎訳 青土社.
- ヒューム, デイヴィッド. 1995. 『人間本性論 第一巻』木曾好能訳 法政大学出版局.
- プラトン. 1975. 「パイドン」松永雄二訳『プラトン全集 第1巻』岩波書店.

- 山崎正和. 1988 [初版 1983]. 『演技する精神』中公文庫.
- Albritton, Rogers. 1985 [2003]. Freedom of Will and Freedom of Action. *The Proceedings and Addresses of the American Philosophical Association*, 59/2 (1985), pp.239-51. In Gary Watson ,(ed.). *Free Will, Second Edition*. Oxford: Oxford University Press (2003), pp.408-423
- Anscombe, G. E. M. 1957. *Intention*. Oxford: Basil Blackwell.
- Bradley, F. H. 1883. Is self-sacrifice an enigma? *Mind*, o.s. viii, No. 30. pp.258-60.
- Bradley, F. H. 1894. The Limits of Individual and National Self-Sacrifice. *The International Journal of Ethics*. Vol. 5. No.1. October, 1894. pp.17-28.
- Bruner, J. 1983. *Child's Talk*. New York: Norton and Company.
- Butterworth, G. 1994. Theory of Mind and the Facts of Embodiment. In C. Lewis and P. Mitchell (eds.), 1994. *Children's Early Understanding of Mind* (pp. 115-132). Hove UK: Lawrence Erlbaum.
- Butterworth, G. 2001. Joint Visual Attention in Infancy. In G. Bremner and A. Fogel, (eds.). *Blackwell Handbook of Infant Development* (pp.213-240). Oxford: Basil Blackwell.
- Butterworth, G. and Jarrett, N. 1991. What minds have in common is space: Spacial mechanisms serving joint visual attention in infancy. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, pp.55-72.
- Carter, J. (ed.). 2003. *Understanding Religious Sacrifice: A Reader*. Continuum Intl Pub Group.
- Davidson, D. 1963. Actions, Reasons, and Causes. In Donald Davidson, *Essays on Actions and Events* (pp.3-19). Oxford: Oxford University Press. 1980.
- Davidson, D. 1978. Intending. In Donald Davidson, *Essays on Actions and Events* (pp.83-102). Oxford: Oxford University Press. 1980.
- Flavell, J. H. 1988. The development of children's knowledge about the mind: From cognitive connections to mental representations. In J. W. Astington, P. L. Harris, and D. R. Olson. (eds.). 1988. *Developing Theories of Mind* (pp.244-267). Cambridge: Cambridge University Press.
- Gelven, M. 1988. Is sacrifice a virtue? *The Journal of Value Inquiry*. Vol. 22, No.3, pp.235-252.
- Gilbert, M. 1997. What Is It For *Us* To Intend? In Holmstom-Hintikka and R. Tuomela (eds.). 1997. *Contemporary Action Theory. Vol. II.* (pp.65-86). Dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Gopnik, A. 1993. How we know our minds: The illusion of first-person knowledge of intentionality. *Behavioral and Brain Sciences*, Vol. 16, pp. 1-14.
- Gopnik, A., and Astington, J. W., 1988: 'Children's Understanding of Representational Change and Its Relation to the Understanding of False Belief and the Appearance-Reality Distinction', *Child Development*, 59, pp.26-37.
- Hume, D. 2000. *A Treatise of Human Nature*. Oxford: Oxford University Press.
- Kindaichi, K. 1949. The Concepts Behind the Ainu Bear Festival (Kumamatsuri). *Southwestern Journal of Anthropology*, Vol.5, No. 4, pp.345-350.
- Kitagawa, J. M. 1961. Ainu Bear Festival (IYOMANTE). *History of Religions*, Vol. 1, No.1, pp.95-151.
- Leslie, A. M., 1987. Pretense and Representation: The Origins of "Theory of Mind",

- Psychological Review*, Vol.94, No. 4, pp.412-426.
- Leslie, A. M., 1994. *Pretending and Believing: issues in the theory of ToMM*, *Cognition*, 50, pp.211-238.
- McCune-Nicolich, L. 1981. Toward Symbolic Functioning: Structure of Early Pretend Games and Potential Parallels with Language. *Child Development*, 52, pp.785-797.
- Meltzoff, A. N., 1995: 'Understanding the Intentions of Others: Re-Enactment of Intended Acts by 18-Month-Old Children', *Developmental Psychology*, Vol. 31, No. 5, pp.838-850.
- Meltzoff, A. N., and Moore, M. K., 1977. Imitation of Facial and Manual Gestures by Human Neonates. *Science*, 198, pp.75-78.
- Meltzoff, A. N., and Moore, M. K., 1983. Newborn Infants Imitate Adult Facial Gestures. *Child Development*, 54, pp.702-709.
- Nichols S. and Stich, S. 2003. *Mindreading: An Integrated Account of Pretence, Self-Awareness, and Understanding Other Minds*. Oxford: Oxford University Press.
- Overvold, Mark Carl. 1980. Self-interest and the Concept of Self-sacrifice. *Canadian Journal of Philosophy*, Volume X, Number 1, March 1980, 105-118.
- Overvold, Mark Carl. 1982. Self-interest and Getting What You Want. In Harlan B. Miller and William H. Williams (eds.). *The Limits of Utilitarianism* (pp.186-194). University of Minnesota Press.
- Perner, J., 1988. Developing semantics for theories of mind: From propositional attitudes to mental representation. In Astington, J. W., Harris, P. L., and Olson, D. R., (eds), 1988. *Developing Theories of Mind* (pp.141-172). Cambridge: Cambridge University Press.
- Perner, J., Leekam, S. R., and Wimmer, H., 1987: 'Three-year-olds' difficulty with false belief : The case for a conceptual deficit', *British Journal of Developmental Psychology* , 5, pp.125-137.
- Scaife, M. and Bruner, J. S. 1975. The capacity for joint visual attention in the infant. *Nature*, Vol.253, 265-266.
- Sinclair, J. et als. 1987. *Collins COBUILD English Language Dictionary*. London and Gragow: William Collins Sons & Co. Ltd.
- Tomasello, M. 1995. Joint Attention as Social Cognition. In Moore, C. and Dunham, P. J. (Eds.), 1995. *Joint Attention: Its origins and Role in Development* (pp.103-130). Hillsdale , New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Tomasello, M. 1999. Having Intentions, Understanding Intentions, and Understanding Communicative Intentions. In Zelano, P. D. Astington, J. W. and Olson, D. R. (Eds.), 1999. *Developing Theories of Intentions: Social Understanding and Self-Control* (pp.63-75). Mahwah, New Jersey: Lawrence Erlbaum.
- Tomasello, M. 2001. Perceiving intentions and learning words in the second year of life. In Bowerman, M. and Levinson, S.C. (Eds.). 2001. *Language Acquisition and Conceptual Development* (pp.132-158). Cambridge UK: Cambridge University Press.
- Walton, K. 1990. *Mimesis as Make-Believe*. Cambridge MA: Harvard University Press.
- Wellman, H. M., and Estes, D., 1986. Early Understanding of Mental Entities: A Reexamination of Childhood Realism. *Child Development*, 57, pp.910-923.

- Wellman, H. M., and Cross, D.,and Watson, J. 2001. Meta-analysis of Theory-of-Mind Development: The Truth about False Belief. *Child Development*, Vol. 72, No. 3, pp.655-684.
- Wimmer, H. and Perner, J., 1983. Belief about beliefs : Representation and constraining function of wrong beliefs in young children's understanding of deception. *Cognition*, 13 pp.103-128.
- Wimmer, H., and Hartl, M., 1991. Against the Cartesian view on mind: Young children's difficulty with own false beliefs. *British Journal of Developmental Psychology*, 9, pp.125-138.